

高知県の化石

【概要と近年の状況】

高知県内には、シルル紀から第四紀にわたる、幅広い年代の化石が見つかっており、多様な化石を見ることができます。化石は、過去に見つかったきりその後全く見つからないことも少なくありません。しかし、^{びかせき}微化石や貝化石などは、その後も継続的に採集できることが多いものです。以下、ジュラ紀以降の高知県産大型動物化石（顕微鏡を使わなくても分かる普通サイズの化石）を中心に解説します。

高知県内で最も手軽に化石採集のできる場所は、室戸半島西岸の安田町や田野町に分布する唐の浜層群でしょう。特に、ごめん・なはり線「唐の浜」駅の北に整備された農道沿いには、多くの貝化石が見られました。ここには、300万年前から240万年前の土佐湾の海底に生息した、貝、ウニ、サンゴ、カニ、クジラの^{せきつい}背椎骨、サメの歯など、さまざまな化石が見つっています。残念ながら、農道の整備が進むにしたがって、その^{ろつう}露頭（地層がむき出しになっている崖）の多くが覆われてしまいましたが、現在でも一部が化石採集場として残されており、観察や採集は可能です。

また、ここには、最近定義の変わった^{せんしんせい}鮮新世（533～259万年前）と第四紀（現在から259万年前）の境界があります。この時代の少し前、地球の気候は周期的な寒暖を繰り返すようになるとともに、寒冷化に向かい次第に現在の状態に近づいていったことが分かっています。この意味でも、安田町唐の浜は、学術研究上、重要な地域となっています。唐の浜層群は、従来から多くの研究が行われてきましたが、近年、高知大学のグループにより、野外調査や陸上掘削、また、化石の^{どういたいぶんせき}同位体分析などの研究が精力的に進められており、従来の^{ちけん}知見が大幅に塗りかえられつつあります。



写真2. 羽根岬に見られる生痕化石
海底面を下から見上げている状態です。



写真1. 安田町唐の浜での化石採集風景

鮮新世は新第三紀（2300～533万年前）最後の時代ですが、これより古い新第三紀の化石はあまり知られていません。古第三紀（6550～2300万年前）では、四万十市西方で貝類の化石が知られています。また、室戸岬西岸の羽根岬には、深海生物の生痕化石（巣穴やはい跡など、生活の痕跡の化石）の見事な露頭があります。

ここに見られる細長い縄状の跡は、従来ゴカイそのものと考えられていたのですが、最近、

高知大学の奈良正和准教授らの研究によって、深海性二枚貝が餌を食べながら移動した痕跡であることが明らかとなっています。

中生代では、白亜紀（1億4,600～6,550万年前）の地層が多く場所に分布しています。白亜紀の化石では、トリゴニア（サンカクガイ）類などの二枚貝、巻貝、ウニ、アンモナイト、など、白亜紀の海や汽水域の動物化石が多く見つかっていて、高知大学名誉教授田代正之先生により詳しく報告されています。四万十市北の佐田地域から知られてきた石灰岩体は、静岡大学延原尊美准教授を中心とする研究グループによって最近詳しく研究され始め、海底からの大規模な湧水^{わきみず}に群がった化石群集であったことが明らかになっています。ここには、大型二枚貝のオウナガイ類が、正体不明のチューブ状化石とともに、多数産出しています。

また、植物の化石もしばしば見つかります。南国市領石の白亜紀植物は、領石植物群として世界的に知られています。高知自動車道南国インター建設の際には、多くの化石が採集されました。



写真 4. 佐川町の鳥の巣層群から発見されたルディスト
左巻の巻貝のように見えますが、れっきとした二枚貝です。



写真 3. 四万十市佐田のオウナガイ化石
左右の殻がつながった状態のものが生きている状態と異なる姿勢で集積しており、海底の土石流に埋まったものと推定されています。

サンゴや層孔虫^{そうこうちゅう}、二枚貝など、ジュラ紀（2億～1億4600万年前）の化石も、佐川町の鳥の巣層群に知られてきました。最近では、厚歯二枚貝（ルディスト）と呼ばれる、特異な形で知られる絶滅二枚貝類が、鳥の巣層群から続々と見つかり、福井県立恐竜博物館の佐野晋一主任研究員を中心に研究が進んでいます。

佐川町から産出するルディスト類の化石はこれまでアジア地域には全く知られていなかった貴重なものが多く、これらの研究成果に基づいて、ルディスト類の進化史が書き換えられつつあります。

高知県内から産出した化石は、佐川地質館、越知町立横倉山自然の森博物館、高知大学サイエンスギャラリー、徳島県立博物館、東京大学総合研究博物館などに保管・展示されています。

近藤康生（高知大学理学部）